

おいしい米は土づくりから！

◎稲わら腐熟でワキにくい圃場を作る！

◎土づくり肥料・有機物施用でおいしい米づくり！

1 秋から始める異常還元（ワキ）対策！

(1) 稲わら腐熟促進の方法

稲わら腐熟の方法は、「秋の浅耕」や石灰窒素等「稲わら腐熟資材の散布」があります。また、稲わらの腐熟を早める温度は10℃以上で、10℃以下では腐熟速度が大幅に低下するため、**収穫後なるべく早く行うことが重要**です。下表を参考にして、圃場条件や今年の稲の生育や産米の状況により、自分に合った方法で実施しましょう。

表 秋に行うワキ対策の方法

	秋の浅耕	石灰窒素の散布
実施時期	収穫後なるべく早く	(遅くとも10月下旬まで)
実施方法	深さ5cm程度で浅く耕起する。	「つや姫」「雪若丸」では現物10kg/10aを散布 その他品種で現物10~20kg/10aを散布 ※連年の施用で生育が過剰になるようであれば、施用を控えるか基肥量や追肥量を減らして対応する。
実施可能な圃場条件	実施時に圃場が一定程度乾いている。	玄米粗タンパク質含有率が毎年高い圃場では施用しない。
注意点	排水不良圃場では、春先の作業に支障をきたす場合がある。	玄米粗タンパク質含有率がやや高まる場合がある→生育状況に応じた追肥とする。

(2) 稲わら腐熟のポイント！

秋の浅耕を行う場合のポイント

○秋は浅く(約5cm)、春は深く(約15cm)耕起します。

浅く耕起することで、次の効果が得られます。

- ・上層ほど地温が高いため、稲わらの分解が進む
- ・春の耕起の支障とならない

○排水不良等で圃場が乾きにくい場合は次のいずれかで対応しましょう。

- ・水口や圃場入口等乾きにくい部分以外に実施
- ・サブソイラー等で透水性を改善した後に実施

写真(右) 秋の浅耕後の様子

上:未実施部分との境界 下:稲わらが土壌と混和されている



石灰窒素散布を行う場合のポイント

○収穫後なるべく早く散布しましょう（遅くとも10月下旬まで）。
「つや姫」「雪若丸」では現物10kg/10aの散布とします。
但し、「つや姫」を栽培する場合、次のような圃場では石灰窒素の使用を見送みましょう。

- ・地力が高い圃場
- ・玄米粗タンパク質含有率が7.0%（乾物）以上となる圃場
- ・全量基肥施肥を行っている圃場

土壌pH改善の効果

○庄内の水田土壌のpH（ピーエイチ）は低下傾向にあり、基準値の下限値（pH5.5）を下回る圃場が8割以上となっています。（農業総合研究センター H27）

土壌のpHを高めることで稲わらの腐熟は進みやすくなるため（図1）、石灰窒素、ケイカル、ようりん等の散布により、土壌pHの改善を図りましょう。

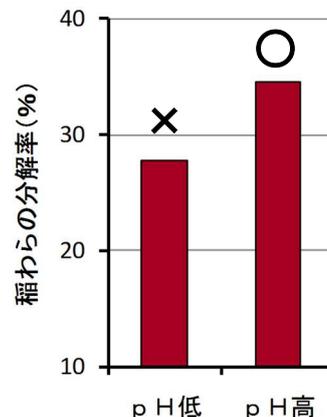


図1 稲わら腐熟へのpHの影響

2 土づくりで品質・食味・収量の向上・安定化を！

(1) 土づくりの効果

堆肥や土づくり資材を施用することで、登熟期までの養分・水分が保持され、品質・食味・収量が向上します。

土づくりの効果は、冷害年、高温・少照年などの厳しい気象の年に特に大きく現れることから、気象の年次変動が大きい近年の稲作では特に重要です。来年の作付けに向けて気象変動に耐えられる圃場を準備しましょう。

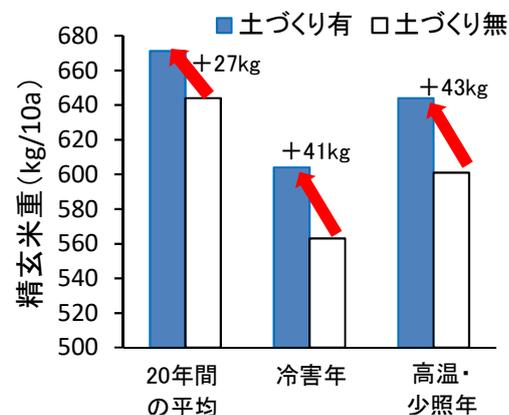


図2 土づくりの有無による収量の比較

※土づくり: ようりん・ケイカルの連用
(農業総合研究センター H30)

(2) ケイ酸肥料の施用

ケイ酸肥料（ケイカル等）施用の効果

受光体勢がよくなり、光合成が促進され、乾物生産が向上する（日照不足の時ほど効果大）

➡ 収量・品質・食味の向上・安定化

(3) 堆肥等有機物の施用

堆肥施用の効果

土壌の養分供給能を高める
土壌を柔らかくし、保水力を高める

➡ 登熟が高まり、収量・品質が向上。白未熟粒・胴割れ粒の発生を防止

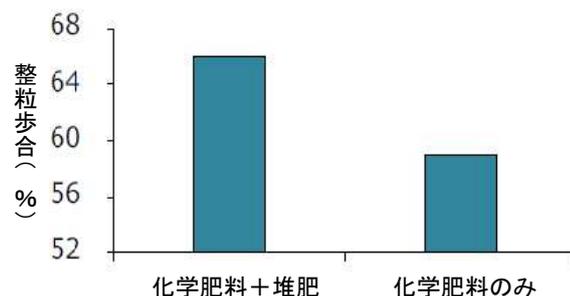


図3 堆肥施用による整粒歩合の向上

※「はえぬぎ」で堆肥は毎年1t/10aを施用
(農業総合研究センター R5)

<秋季農作業事故防止運動強化期間 9/1～10/31>

★見直そう！農業機械作業の安全対策★

機械作業時にトラブルが発生したら、必ずエンジンを停止して対応！

STOP農作業事故！